

牧師室から (2021.9.26)

コロナ新規感染者数が減少傾向にあり、礼拝の再開が待ち遠しい。緊急事態宣言下においては、オンラインで礼拝を提供しており、週末になると収録を行っている。会衆のいないところでマイクに向かって語るというのは、案外やりにくいものであることが分かった。また、収録は周囲の雑音を避けるために、夜中か早朝にやることが多い。

この前夜中に行ったところ、オルガンの横の窓を見たらヤモリがくっついていて、白いお腹と手足の指先の吸盤を久々に見た。「この地上に小さなものが四つある。それは知恵者中の知恵者だ。……やもりは手で捕まえられるが 王の宮殿に住んでいる。」(箴言 30:24、28)。この教会に住む小さな者は、その吸盤を使って壁や窓を縦横無尽に這っていく。とても普通の人間にはできない芸当である(スパイダーマンのような奇人がたまにいるが)。当時王宮や神殿にもよくヤモリがいたのであろう。一般の人にはなかなか入れないようなソロモン王の宮殿に、ヤモリはその独自の能力や知恵で難なく入って居ついてしまうのである。王が自分のために建てた宮殿にちゃっかり住んでしまうというのは、ある面で人間や王よりも知恵があるというのである。言ってみれば作者はここで王を神聖化していないし、また人間が他の生き物よりも絶対的に優れているわけではないということ認識している。確かにキリスト教では、人間は他の生き物と一線を画していて、それらを治めるものであるとされているが、それは決してこの地球を人間中心に、人間の利益中心に考えるということではない。すべての被造物の調和を考えて治めていくということである。それは今日の環境問題やエコロジーに深くかかわる事柄である。

庭のレモンの木にはアゲハの幼虫もいるし、最近教会には色々な「住人」が増え、楽しみも増えた。それぞれの小さな命と共生して、「生きる」「生かされている」とは何かをもう一度問い直したい気がした。

(鈴木淳一牧師)